

# 近代における仏教論議の研究——辻善之助の宗論研究を中心に——

久保田 實

## 1 はじめに

日本の近代は論議から始まるというと、怪訝に思う人が多いと思う。近年の近世から近代への研究は、劇的に変化した。その結果「鎖国」という言葉が、一部の教科書から消えた。理由は、「鎖国」は幕末から多用されたが、幕府は鎖国の意識はなく、交易口も四ヶ所開いていたことが明らかになったからである。<sup>(1)</sup> また「士農工商」が身分制度ではなく、職分を指すと改訂された。これも幕末から明治に多用され、幕府政策を否定的に表す言葉として定着したことが、研究によって明らかにされた結果である。<sup>(2)</sup> もうすぐ江戸時代は「鎖国」によって世界から孤立し、「士農工商」によって縛りつけられていたイメージを持つ世代は、過去となる。こうした近年の幕末近代に関する研究は、今までの概念を変え、次々と新しい概念を生み出している。その一つに「論議」が浮上している。

日本の近代は、いつ始まったのか。それが決定的となったのはいつか。二〇〇二年講談社の『日本の歴史』は、『維新の構想と展開』というテーマを掲げた。このテーマ自体が、近代はいつ始まったかに応える方向にあるといえる。その冒頭で重視されたものが、「五箇条の御誓文」である。慶応四年（明治元年、一九八六）の三月一月三

日に鳥羽・伏見の戦いが始まり、江戸城総攻撃予定日三月十五日の前日の十四日、京都御所紫宸殿において、群臣居並ぶ中で、天皇が天神地祇に誓ったものが五箇条の御誓文である。

- 一、広く會議を興し万機公論に決すべし
- 一、上下心を一にして盛に經綸を行ふべし
- 一、官武一途庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめん事を要す
- 一、旧來の陋習を破り天地の公道に基くべし
- 一、智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし

この御誓文が「維新の構想と展開」の起点となったことを、鈴木淳は次のように説明する。「明治新政府は御誓文が示された二ヵ月後に、政体書で、「国是を定め、制度を建つるには専ら五箇条御誓文の趣旨を以て目的とす」と、今後の新国家の体制作りが御誓文の趣旨に従うことを宣言」する。また政府に対抗する勢力である立志社の建白書も、政府要人大久保利通暗殺者の斬姦状も、「御誓文を引用し、あるいは言及して政府がその精神に反していると批判したのをはじめとして、政府の独裁を批判し、議会の開設を求める人々も御誓文にその根拠を求めた。御誓文で示された構想には、官民の幅広い合意があったのである」と、御誓文の影響力を説明した。<sup>(3)</sup> 大正時代には、「誓の御柱」<sup>(4)</sup> 建立運動があり、敗戦の昭和二十一年正月の昭和天皇の「人間宣言」では、冒頭で御誓文を引用し、「朕ハ茲ニ誓フ新ニシテ国運ヲ開カント欲ス」と述べられ、加えて天皇は神ではなく、国民の信賴と敬愛によって結びついた存在であるとした。以後民主国家現代日本が始まる。こう考えると、御誓文が近代の国家の始まりにあったといえる。その御誓文の第一条の「広く會議を興し万機公論に決すべし」が、広く論議をすべしという意味であり、この論議の有り方をめぐって、立志社の建白書も、斬姦状も、議会の開設請求もなされたのである。こうしたこと

から日本の近代は論議から始まると言えるだろう。

議論するために自分の意見を主張し、演説をしようと福沢諭吉は訴え、加えて西欧の議論の有り方を掲げ、日本の行路を示した。<sup>(5)</sup>これが引き金となって、世の中は演説と議論が沸騰し、演説・議論する結社が各地に組織され、劇場では、各種芸能と共に、演説が上演され、それを聞き議論する聴衆が溢れた。<sup>(6)</sup>

以上のように明治は、論議から始まり、議論が広まる時代である。その中で、仏教界は、明治元年の神仏分離令以後の、廃仏毀釈による寺仏破却、混乱に加えて、明治四年の上知令により境内墓地以外の土地返納、明治五年教部省設置以降の布教抑制など、多難な時代であった。廃仏が治まり、明治十年に教部省が廃止されると、次第に仏教復興への動きが始まる。明治の議論の沸騰の中で、西洋の論議力に対抗して、仏教の論議力を主張したのが雲英<sup>きら</sup>晃耀<sup>こうよう</sup>である。また歴史学の中で、中世における仏教論議の影響力を発見したのが辻善之助である。

## 2 近代最初の論議研究

「五箇条の御誓文」から始まる明治の論議の興隆は、福沢諭吉のベストセラー『学問のすすめ』『文明論之概略』によって、演説や議論が日本中の人々に認知されただけではなく、演説会や討論会の実演を通じ学ばれる。<sup>(7)</sup>その方法や技法が注目され、福沢諭吉の『会議弁』、尾崎行雄の『公開演説法』等次々と出版される。<sup>(8)</sup>明治八年の「立憲政体の詔書」により、「万機公論」の具体的実現が目指され、明治十一年の府県会により、地方にも演説・議論の必要性が高まり広がる。明治十四年に「国会開設の勅諭」により、明治二十三年を期して、憲法制定、国会開設と決まる。それに向かって演説と議論が沸騰する。

そうした中で議論の根底にある論理学が西周によって紹介される。西が依拠したミルの論理学を、循環論と批判した当時最新の論理学者スタンレー・セボンの論理学等が次々と翻訳される。こうした論理学流行に対し東洋の論理学である因明研究者の雲英晃耀が、明治十四年（一八八一）に『因明初歩』を発表し、「因明ト云フハ、何ナル法ナリヤ。答フ、因明ハ印度ノ議論法ナリ。此ノ法ニ由リテ議論ヲスレバ一切道理アル論ニ、負ケル氣遣ハナイ。」と主張した<sup>(9)</sup>。この年、雲英は次々と因明書を刊行し、著作のみならず、講演会を次々開く<sup>(11)</sup>。講演会記録によると、その講演範囲は、全国に及び、その聴衆は僧侶以外に、政治家・議員・裁判官・司法関係に及ぶ。雲英の研究や講演活動は、明治二十三年の憲法制定・国会開設に向けて活発化してゆく。

雲英の因明研究は、論議法の紹介から、我が国の論議史研究に及ぶ。明治十七年（一八四四）の『因明活眼』第二章「因明沿革」で、印度・中国における因明の歴史に続いて日本の因明の歴史を検討する。伝来は、四伝とする。第一伝は白雉四年（六五三）の道昭。第二伝は斉明帝四年（六五八）の智通・智達。第三伝は、大宝三年（七〇三）の智鳳・智鸞・智雄。第四伝は、靈龜二年（七一一）の玄昉とする。四伝以降は道昭派の南寺伝と玄昉派の北寺伝の二派を区別する。この後、因明学派の紹介から、因明の社会的影響について論じている部分が注目される。

人王六十世醍醐帝、延喜ノ頃、主上モ因明ヲ好ミ給ヘバ、殿中ノ論筵ニ、互ニ因明ノ規則ニテ論議ヲセシコトアリト。サスレバ慈恵大師ノ時分ニハ、因明大流行ニテ、恵心僧都ハ俱舎・因明ハ此ノ土ニ究ムト申サレシ程ニテ、各宗ニ名高キ因明者アリ。宇治左大臣頼長公モ因明ノ達人ナル故ニ、何寺相承ニ載ス。又タ聞ク、輓近、聴訟ニ名高キ大岡越前守モ此ノ法ヲ学ビテ裁判ヲナス。依テ其ノ裁判、明決一モ理ニ契ハザルハナシト。意フニ亦因明活用ノ実効ナリ。近來各宗ニ於テ、長老碩徳、日ヲ追フテ此ノ学ヲ講究セラレ、加フルニ会議ノ盛ナル時勢ナレバ、数年ヲ経ズシテ、此ノ学大ニ流行スルニ至ラン歟。是レ我が予期企望スル所ナリ<sup>(12)</sup>。

単なる仏教の因明学派の説明を越えて、因明が大流行したことを叙述している。まず醍醐帝が因明を好み、論議するための論筵（論議場）を宮中に設け、因明の規則に従って、論議をさせたのが延喜の頃（九〇一）である。そうしたことによって慈恵大師の頃には、因明は大流行した。また恵心僧都源信は俱舎・因明において、その道を究めたという。また各宗ともに有名な因明者が生まれた。宇治の左大臣頼長も、因明の達人であるとして南寺相承に載っていると因明流行の歴史を説明している。これは、因明学史的解説から外れて、論議史的な説明である。天皇が論議の活性化を促し、大臣が論議の核となる因明の研究をし、それを支えたというのである。因明学を支え、発展させた因明学者に関しては、「各宗二名高キ因明者アリ。」とあるのみである。語っているのは、「因明ノ規則ニテ論議」する風潮の広がりである。その影響は晩近に及び、裁判官として有名な、大岡越前守も因明を学び、裁判を行った。そのことによって裁判は明決であり、一つも理に契かなわれないことはなかったという。これが「因明活用ノ実効」であるという。即ち因明は国家運営の論議や裁判に実際的な効果があることを主張するのである。

明治二十二年（一八八九）雲英晃耀は、『東洋新々因明發揮』を発表する。

東洋ニハ因明即チヘイドウウイダヤ醯都費陀アリ。西洋ニハ論理即チ路日ロジック克アリ。蘭菊美ヲ争ヒ金玉光ヲ競フト雖モ、対照比較スルニ互ニ優劣得失アリ。因テ今ニ論法ノ長所ヲ撰取シテ、別ニ機軸ヲ出シ、新々因明ト名クル。<sup>(13)</sup>

因明とロジックを比較し、その長所を選び取って、新々因明としたのである。これに対して雲英への反論や再反論・新提案など、因明研究は活性化し、明治後半まで続く。<sup>(14)</sup>しかしこれらの因明研究は、雲英が目指した「因明活用ノ実効」即ち因明は国家運営の論議や裁判に実際的な効果があることを主張する方向には発展せず、論議史研究の方向にも進まなかった。

因明の研究の主戦場は、『哲学会雑誌』であった。『哲学会雑誌』は、帝国大学哲学科を中心に組織された哲学会



の機関誌で明治二十年（一八八七）より発刊された。これに引き続いて国史学科を中心にした史学会の機関誌『史学雑誌』が明治二十二年（一八八九）より発刊された。この史学雑誌の中で、因明の論議とは全く関わらない論議の研究をしたのが辻善之助である。

### 3 辻善之助の研究テーマ

辻善之助は、明治十年（一八七七）四月十五日に、姫路元塩町の商家に生まれる。父善次郎は、息子を家業でなく学問の道で立つべく、常に励ます。それに応え、姫路中から京都三高へ進学。三高の予科廃止により、一高に転学。この時、同郷の帝大史料編纂官三上参次が身元保証人となる。向学に燃える十八歳の善之助は、一橋講堂にて初めて史学会講演を聞き、国文か国史への進学を望むが、保証人三上の勧めにより帝国大学国史に進学する。明治三十年二十一歳国史科一年生論文「後北条氏疆域考」が指導教授の推薦で史学界に掲載され、学会デビューする。この頃より史学編纂官の三上の史料採訪に随行し、学ぶ。明治三十二年大学院入学。テーマは「政治の方面より観察したる日本仏教史」である。

辻の「政治の方面より観察したる日本仏教史」という研究テーマは、辻の研究姿勢の基軸となる。この研究目標の設定に関し、辻は『自歴年譜稿』で次のように説明する。

先考夙くより真宗の篤信者として、常に念仏の声を断たず。予がもの覚えたる頃には、父は頗る真宗の教旨に通じ、寺より帰りては、その日の説教が、真宗安心の趣旨に違ふものありしを難ざるばかりになれる。予等姉弟等は、三度々々の食事には、必ずまず仏前に礼拝せしめらるるの煩をかこちき。かかる信仰の深きは、蓋し

曾祖父より受けたる伝統的潜在意識の然らしめたるにやあらん。予が仏教史研究に志したるも、暗冥の中に、父の感化影響によるものありとやいはまし。<sup>(15)</sup>

曾祖父以来の仏教信仰の伝統が潜在意識に影響し、暗冥の中に父の感化を受けて、仏教史研究を志したとしているが、「政治の方面より」の研究を志した面も暗に説明している。それは父の信仰に対する姿勢の説明に窺われる。父の「頗る真宗の教旨に通じ」、それにこだわる姿勢を「難ずるばかりになれる」と評し、食前に「必ずまず仏前に礼拝せしめらるる」習慣を、「煩をかこちき」経験として表現するところに見て取れる。真宗の教旨に通じた父が、真宗の僧の説教を、真宗の安心の思想と違うと非難し続ける姿勢を「難ずるばかり」と評するのは、仏教の教理・教義を支える思想が、実は仏教の宗派・教派間における些細な違いであり、それにこだわる姿勢への違和感の表明である。また自然な信仰の発露を越えた強い信仰心からくる父の、信仰行動の強要を「煩をかこちき」とする意識の差は大きい。ここには仏教を思想的側面から見つめる姿勢に対する懐疑があり、信仰行動への疑問が内包されている。これらは仏教を思想的・信仰史的方面からみることへのためらいの姿勢を示している。すなわち仏教史を教理的・思想的にはなく、「政治の方面より」研究することを暗に示しているのである。

この部分に関して、オリオン・クラウタウは、「真宗の教旨に通じ」ている父に対して、寺で説教した僧の「真宗安心の趣旨に違ふ」点を重視し、「父を通して、仏教の担い手としての僧侶の特権的な位置を相対化できるよう環境で幼児期を過ごし」、「教義の十分な理解を示さない僧侶のイメージ」が形成され、それが後の近世の僧の墮落の批判につながっていると論じる。<sup>(16)</sup>クラウタウの引用は、昭和二十八年雑誌『思想』に掲載するために執筆された「研究生生活の思ひ出」からの引用である。<sup>(17)</sup>本引用は昭和二十二年執筆の『自歴年譜稿』の「明治二十三年七月十日、帝国大学大学院入学・「政治の方面より観察したる日本仏教史」を研究す」の項に付されたものの引用である。

前者は、『思想』誌上への掲載を意識して書かれたものであるのに対し、後者はそうした掲載を意識せずに記されたものであり、より辻の実感に近い記述である。クラウタウが読み、引用したものは「難ずるばかりになれる」や「煩をかこちき」といった父の信仰姿勢に対する本音の部分が削除されたものである。いずれの文脈でも、僧のイメージは重視されていないが、より辻の本音に近い『自歴年譜稿』によれば、父の教旨に拘泥する姿勢に対する懷疑や、自然に感じられない信仰行動への疑問に重点がある。中でも父が拘泥し、強く印象に残された「真宗安心の趣旨」に関しては、『日本文化と仏教』において、次のように説明している。

宗旨の安心の建て方が違うというので争がしばしば起って居る。即ち異安心の諍論である。その争の中には、その宗旨に取ってはやかましい問題であるかも知れないが、外からこれを眺めると実に詰らぬことのように思われるものがある。

父がこだわった「真宗安心の趣旨」とは、「外からこれを眺めると実に詰らぬことのように思われる」として、仏教を外から眺めるといふ辻の基本的な姿勢が明確に表明されている。そしてこの姿勢は、幼児期に、父の宗旨に拘泥する姿勢との関わりの中で形成されたものである。

すなわち辻善之助の大学院での研究テーマ「政治の方面より観察したる日本仏教史」とは、仏教を宗旨・思想方面からではなく、外から、史学上の問題として眺めるといふ意思表示なのである。

#### 4 辻善之助の日本仏教史研究

辻善之助の父は、大正六年（一九一七）三月二日に亡くなる。その三周忌を記念して、日本仏教史に関係する旧



稿を選び『日本仏教史之研究』を大正八年に発表する。史学会所属の学者として初めての日本仏教史の著述である。その構成は次のようである。

章・論文名	初出年	行数
一・国分寺考	明治三十一年（一八九八）	四十行
二・本地垂述説の起源について	明治四十年（一九〇七）	一一三行
三・顕戒論撰述の由来について	大正五年（一九一六）	十一行
四・新羅明神考 附三井寺の起り	大正四年（一九一五）	十一行
五・平安朝仏教史上に於ける中尊寺の地位	大正四年（一九一五）	二三行
六・信仰と趣味	大正七年（一九一八）	二六行
七・鎌倉時代における禅宗と他宗の軋轢（正中宗論）	明治四十年（一九〇七）	三一行
八・足利初代天台宗と禅宗の軋轢	明治三十三年（一九〇〇）	七五行
九・足利尊氏の信仰	大正五年（一九一六）	二一行
十・夢憲国師	大正六年（一九一七）	二一行
十一・安国寺利生塔考	明治三十七年（一九〇四）	五七行
十二・戦国時代の仏教	明治四十二年（一九〇九）	十四行
十三・織田信長と仏教	明治四十四年（一九一一）	八行
十四・安土宗論の真相	明治四十四年（一九一一）	三九行
十五・慶長十三年浄土日蓮宗論について	明治三十六年（一九〇二）	三四行

十六・史上より観たる日光廟

大正 四年（一九一五） 十五行

十七・一絲和尚と朝幕関係

明治四二年（一九〇九） 六九行

十八・沢庵和尚と將軍家光

明治四四年（一九一一） 四三行

全体は凡そ時代順の配列である。一〜六が平安時代まで、七〜十四が鎌倉から戦国時代・中世の論文である。十五〜十八が江戸時代・近世の論文である。

『日本仏教史之研究』が高く評価され、二年後に帝国学士院から恩賜賞が授与される。その授賞審査要旨によると、「奈良時代以前ヨリ近世初頭ニ及ビ從來ノ仏教歴史ニ比スレバ其研究ニ新生面ヲ開キタルヲ見ル十八篇」と評された。<sup>(18)</sup> 内容を「一般思想界及ビ文化史」と「政教ノ関係」の二種類に分類する。前者では「二・本地垂述説の起源について」が最も高く評価された。後者では「一・国分寺考」と「十一・安国寺利生塔考」が、新しい見解であるとともに、全国に及ぶ多大な労力を要する調査であることが評価され、続いて「十四・安土宗論の真相」が「新ニ発見セル材料ニヨリテ此宗論ノ顛末ヲ公平ニ解剖シ織田信長ノ宗教策ニ論及」し、「十三・織田信長と仏教」では、信長と秀吉の宗教策の違い、「十五・慶長一三年浄土日蓮宗論について」、「十六・史上より観たる日光廟」の、家康の宗教策や宗教姿勢などが注目評価されている。主な注目点は、一般思想及び文化に関する本地垂述説に関する研究、全国的規模の宗教政策としての国分寺・安国寺の研究、そして新発見・新視点からの安土宗論や慶長宗論などの研究の三点である。これらが評価され、恩賜賞が授与された。本地垂述説に関する研究は、本著最大の一一三行に及ぶ大論文である。これは明治四十年（一九〇七）、『史学雑誌』第十八編一号以後、六回に分け発表された。ところがこの論文には先行論文があった。明治三十年（一八九七）の喜田貞吉「弘法大師に関する誤解に就いて」特に本地垂述説に就いて」である。この論文は、真宗の青年僧たちの反省会の機関紙「反省会雑誌」に発表

された。この反省会とは、一八四〇年ころから活発となるアメリカのキリスト教社会運動の一つとしての禁酒運動の影響を受け、真宗青年僧が始めた思想運動の一つである。<sup>(19)</sup> 辻善之助にとっては、無縁の世界の雑誌である。辻は発表の途中で、この論文を知らされる。辻の長男の後日談によると、辻は夏休みを潰して史料編纂所に通って史料を採し、「本地垂迹神経衰弱」と母や姉がいうほど必死に、喜田の論文を超えるべく史料を博搜したという。<sup>(20)</sup> その結果、大論文となったのである。国分寺の研究は、辻の保証人で史料編纂所の三上参次に付き従って各地の史料探訪の影響から、帝国大学文科大学に入ってから以後、史料と史蹟資料を収集し、二年次に「国分寺の盛衰」、三年次に「国分寺考」、「国分寺の位置」と発表を積み重ねたテーマである。それに夢窓疎石の「安国寺」を関連させ、独自の考察を加えた論考は、共に調査・労力多大と受賞において評価された。

次の安土宗論や慶長宗論などの研究には、どんな動機・経緯があるのであろうか。宗論とは、仏教の宗門によって異なる教義を、どちらが正しいかの決着を付けるための論議のことをいう。宗論に係る論文は、七・八・十二・十三・十四・十五の六本である。『日本仏教史之研究』全十八本の三分の一である。中世論文全八本の内、五本、三分の二が、宗論関連の論文ということになる。この中で辻善之助は「この宗論と申すものは、戦国時代の一つの特徴と認めるべきもの」としているが、それは頂点が戦国時代であり、鎌倉時代の最初の論文から宗論関連であり、中世全体の特徴の一つに宗論を見出したといって過言でない。この宗論に着目したきっかけは何だったのか。宗論を含む仏教宗派間問題は、近世には繰り返されたが、明治以降はなくなった。それはそれ以上の大問題が生じたからである。明治の廃仏毀釈、神道国教化、キリスト教公認である。これによって、すべての仏教宗派が共に苦しむ事態となり、それに対処するため、仏教諸宗が協力し合う体制が生まれる。中でも仏教諸宗が集まった諸宗同徳会盟の結成は、画期的であった。諸宗同徳会盟は明治二年（一九八六）に、規約を作成した。その第一条が

「一、会盟之諸徳、自他宗之習染ヲ脱シ、一味和合シテ、疎意ナク力ヲ戮シテ、只管法命相続二荷担スヘキ事」である。集まった仏教諸宗は、自宗他宗を区別し争う習いを脱し、共に和合して、今までのように疎んじることなく力を合わせて、ひたすら仏法の命を相続することを約するのである。仏教諸宗はこの方向で、協力し合う形で近代的教育制度と研究体制を整備してゆく。こうした研究体制の中では、宗門間の違いを荒立て、協調を破る原因となるような研究は避けられていた。ところがあえて宗門間の教義の違いを明確にする研究を発表したのが村上専精である。

## 5 村上専精の日本仏教史研究

村上専精は、嘉永四年（一八五二）四月に、丹波の寒村僻地の貧寺に生まれた。父は学問をさせたいと、幼くして浄土三部経を教えた。そして八歳で学問のできる別の寺に居候とした。以後色んな寺の居候生活をしながら、漢学などを学ぶ。十八歳で資金のないまま故郷丹波を出て、姫路・新潟・三河・京都に学ぶ。この放浪学問を自身は乞食学問と称す。それを見かねた僧友が、三河入覚寺の村上界雄の養子にした。この親戚に著名な因明学者雲英晃耀がいて、弟子となり因明を学ぶ。この因明を、曹洞宗豊川妙嚴寺で講義した縁で、東京の曹洞宗大学で因明・唯識・俱舍論を講じ、続けて哲学館の講師、大谷 교校長を経て、ついに明治二十三年（一八九〇）帝国大学印度哲学の講師の嘱託となる。

この時期に仏教を歴史思想によって書くことの必要性を強く意識する。自伝『六十一年』の「吾輩が仏教史研究の志を発せし動機」に次のように記す。儒学は「支那の二十一史を読まざるを以て恥辱となす傾向」があり、国学

神道は「国史を離れて成立するものでない」のに対し、「独り歴史思想の全く欠乏して居たものは、仏教徒であつた」とした。「歴史思想の欠乏の結果、教理上の研究にその正鵠を失うことがあつても、そんなことには一向気がつかないのである。」と、仏教の研究法を反省する。これに気付かされたのは、二つの出来事だという。一つは、「吾輩東京に来て、西洋流の新式研究法を見聞せしところ、何等の学問と難も、之を歴史的方而より研究せぬものとしては殆んど一もないと謂つてよい景況」であつたこと。今一つは、帝国大学の教員控室において、三上参次と史料編纂の事について話した時に、三上から「明治八年以降国庫より莫大の費用を投じ、今日まで已に集めしもののかくの如く実に積んで岳の如しといふ有様である。然るにこの沢山な史料、三分の二以上は仏教史の材料である。思へば日本は実に仏教国であつた。仏教史を除けば日本歴史は成立しない」と、繰り返言われたことを記す。続けて村上は、「吾輩この話を聴いて斯う思ふた、我が仏教はかくの如く国家の発展につき相離るべからざる歴史を有するにも係はらず社会多数の人は之を知らずに居る。唯社会の人これを知らざるのみならず仏教徒またこれを知らぬのであるが、いかにも嘆かしき次第である。…己れ自ら之を研究するあたはざるもせめてのことに仏教史研究の導火線にてもなりたいたものであるとの考えを益々深くし」たと記す<sup>(22)</sup>。自分の今までの仏教研究に關し欠点を意識しつつ、新たな研究法として歴史的方法の必要性を感じていた時に、三上参次の膨大な仏教史料を使つての研究を促す指摘に、触発されて仏教史研究の導火線になる決意をしたというのである。

明治二十七年（一八九四）に『仏教史林』を發刊し、本格的に仏教史研究を始める。その創刊号冒頭に「仏教史研究の必要を述べて發刊の由来となし併せて本誌の主義目的を表白す」がある。

四月八日（中略）大聖釈迦牟尼如来の出生ありて、天上天下唯我独尊と唱へたまへる当日なり。而して我『仏教史林』も同じく、此四月八日を卜して世に出生せり。（中略）本誌は仏教史なるが故に、世間史家の研究す



る如く学術的攷究の一方に止まらず、傍ら宗教思想をも含有するものなり。故に本誌は門外より之を見れば学術と宗教の両成分を含有するものといはん。その両成分を含有するか如く見ゆるところ、是れ本誌の主義とする所なり。<sup>(23)</sup>

『仏教史林』は、釈尊が「天上天下唯我独尊」と唱えた同じ四月八日に出生したと宣言する。そして本誌は仏教史であるが故に、世間の史学者が研究するように学術的考究をするだけでなく、一方で宗教思想をも含む。故に本誌は、門外より見ると学術と宗教の両方を含むものと規定した。ここで注目したいのは、「世間史家の研究する如く学術的攷究の一方に止まらず」としたことである。学術的攷究を専らにするのは、三上参次の所属する史料編纂所や国史学科であり、そうした研究を一方で参考にしながら、宗教としての側面も重視するというのである。更に『仏教史林』第二号「吾曹が仏教の歴史を研究する思想（第一）」を発表し、研究の独自性を主張する。

倩、世の歴史家を観るに、現今日本の史家、大に二派に分れたるものゝ如し、其一は学術的なり、他の一は道德的なり、或は云へし、一方は考証的なり、他の一方は伝達的なり、或は云へし、前者は抹殺的なり、後者は保存的なりと。（中略）後者は道德の眼光を以て歴史を研究するものなり。前者は学術の眼光を以て歴史を考究するものなり。（中略）余は二派の中にて前者にも依らず、又後者にも依らず。（中略）仏教の眼光を以て仏教の歴史を見んとするものなり。（中略）一般の思想に肯ひ難きことも真理の順応たる感應道交の原則を以て推すときは、必ず排棄することをえざればなり。古今に涉り、非凡の聖人、拔群の徳者には尋常一様の範圍を越えたる奇瑞靈驗即ち法身仏の応はあるべきとす。何ぞ一概に之を排除することを得ん。<sup>(24)</sup>

世の歴史学者を二派に分ける。一方は学術的・考証的・抹殺的とし、一方は道德的・伝達的・保存的とする。前者は明らかに、明治二十二年創刊の『史学雑誌』を中心とした史学会の歴史学者を指す。史学会初代会長重野安繹は

「学問は遂に考証に帰す」という講演で、「考証とは色々なものをば取り合わせて証拠を執つて定める」という<sup>(25)</sup>。すなわち証拠のないものは史実とは定めがたいのである。定めがたいものは、国史から外した。これによつて重野安繹は「抹殺博士」と揶揄された。学術的・考証的・抹殺的は明らかに、史学会を想定している。もう一方の道德的・伝達の・保存的とは、どんな歴史家か。「道德の眼光を以て歴史を研究する」歴史家である。これは史学会が最も克服すべきものとして批判を繰り返した勸善懲惡主義的に歴史を語る一派ということになる。そして村上たちの立場は、その二派には依らず、「仏教の眼光を以て仏教の歴史を見んとするもの」であるという。「仏教の眼光」とは、「真理の順応」「感應道交の原則」に依る時は、奇跡靈驗と雖も悉くの抹殺はしないという。

続けて教理史に関する研究姿勢を、第三号「吾曹が仏教の歴史を研究する思想(第二)」で次のように述べる。

教史を研究せんとする思想は分て二類あり。其一は一宗一派に限る特別の教史を研究する時の思想、他の一つは各宗各派の相互發達せし景況即ち普通の教史を研究するときの思想是なり。(中略)前者特別の教史の攷究に従事する時は(中略)其宗派の真相を顯揚し、寧ろ弁護することに意を用ひて批評的思想は少しも懷かざるべし。(中略)後者即ち普通の教史の研究に従事する時は、(中略)歴史的研究に比較的和批評的の攷究を雜へ、各宗各派の間に、無私公平の判断を試みんとす。之に依て、或は各宗専門の人よりは非難攻撃の声を聞くともあるべきなり。然れども余は此事を意に介せず、徹頭徹尾、一定の思想を守り、後者の研究は無私公平の批評的判断を試んとするものなり。<sup>(26)</sup>

教理史研究は二類ある。自分の一宗一派に限る特別の教理史研究と、各宗各派が相互に影響しあつて發達する場合の普通の教理史研究という。前者は教えを明示、發揚させるよりも、むしろ弁護することに意を用い、批評的考えは少しも持たない。後者の普通の教理史の研究を行うときは、歴史的研究に比較的和批評的の研究を加えて、各宗

各派の間に、無私公平の判断を試みるという。この方法で非難攻撃の声があつても意に介せず、徹頭徹尾、無私公平の批評的判断を試みると強気に発言した。第二号論文では、史学会の歴史家たちや、勸善懲惡の歴史家に対抗して、帝国大学哲学科の日本仏教史を「仏教の眼光」を以て示すことを宣言しているのに対して、この第三号論文では、廃仏毀釈と強制教導職時代を乗り越えた仏教各宗派が、宗派教育の近代化を目指して成長してきている事態を見据え、その動きを弁護的と批判し、無私公平の批評的判断を基礎とした日本仏教史を、アカデミズムの立場から提示すると宣言したのである。

村上專精は、一方で史学会を見据え、一方で各宗各派の教学研究を見据え、新たな日本仏教史の構想を『仏教史林』において提示し、その成果を明治三十一年九月『日本仏教史綱』上巻、下巻を翌三十二年四月に刊行した。その構成は、次のようである。

第一期 三論・法相時代（十四章）

第二期 天台・真言時代（二十六章）

第三期 浄土・禅・日蓮時代（三十章）

第四期 諸宗持続時代（二十二章）

第五期 明治維新以後の仏教（二章）

主だった諸宗を時代別に並べる。その中の各章において、各宗各派の思想的な違いを記す。第一期では南都六宗の宗派の起源と教義を述べ、第二期では、真言宗と天台宗の起源と教義を述べ、その分派、門下、分流を次々と説明する。第三期でも、浄土宗の源流と教義を述べ、浄土宗の分流、浄土真宗の開立とその分流、時宗の教義を述べ、禅宗においても臨済・曹洞の教義の違い、その門下、分流、分派を述べる。第四期は、徳川幕府の寺家制度による

管理の中にあるが、それでも分流、分立が繰り返されたことが記される。第五期の「明治維新以後の仏教」においても各宗は改革を巡って、各宗分離紛争しているとした。この著作の最後の一文が次である。

爾後益教界の危殆を見んとするに当り、仏教徒は唯晏然として、名利に営々日もまた足らず、人をして遊民無用の嘆を發せしむるに至る。仏教史上の一新時期は、蓋し此最末に加へられざるべからず、第四期以降殊に第五期の仏教史上に至りては大に痛嘆に堪へざるものなり。<sup>(27)</sup>

冒頭の「危殆<sup>きたい</sup>」は、望みある「期待」ではない、絶望的な危殆である。分流分派し続ける絶望的な日本仏教史を描いて「大いに痛嘆に堪へざるものなり。」と嘆いて筆を置く。

その二年後の明治三十四年、村上專精は『仏教統一論』を発表した。緒言において、かの絶望的な『日本仏教史綱』が、実は希望の書であることを明かす。

本現今の仏教界を見るに、その教理は四分五裂するも、誰ありてこれを統一せんとする者なし。各宗は互いに鬨牆の状あるも、一人のこれが調和を講ずる者なし。故に比較宗教学の潮流を聞くと共に、余をしてその必要を感じしめたるものは、仏教各宗の比較研究たりき。これに依りて、余は去ぬる明治三十一年己後、いささか研究の方針を一変したり。即ち歴史研究としては、社会現象の事実史よりも、むしろ思想發達の教理史に注意し、教理研究としては、宗派的部分の研究よりも、むしろ宗派の比較研究よりして、統一的合同調和に尽瘁することとなしぬ。(中略) 本論は余畢生の願望として、心ひそかに仏陀に誓い、これが完結を企図して止まらざるものなり。伏して請う十方三世の諸仏よ、余の心を知ろしめし、余の志を助けたまえ。<sup>(28)</sup>

現在の仏教界の教理は、四分五裂している。各宗は兄弟喧嘩状態で、誰も統一や調和を求める者はない。そうした現状の中で最も必要なのは仏教各宗の比較研究である。私は明治三十一年以後、『日本仏教史綱』上巻発表の時か



ら、研究の方針を一変した。それは歴史研究としては、社会現象の事実史よりも、むしろ思想発達の教理史に注意すべきである。教理研究は、宗派別研究ではなく、宗派の比較研究をして、統一的合同調和を求める研究に全力を尽くすと述べ、統一論は私の畢生の願望として、仏陀に誓い、十方三世の諸仏に、助けを乞うのである。

ここでも『仏教史林』で示した史学会への対決姿勢を、「社会現象の事実史よりも」と示し、仏教各宗派の弁護的研究を「宗派的部分の研究よりも」と排し、思想発達の比較教理史を主張する。その研究姿勢についていう。

仏教を研究するに当り、必須欠くべからざるものは歴史眼たりとす。もしそれ歴史眼を以て教理開展の系統を考うれば、種々分裂せし各宗の教理は、唯一理想の開展にして、各宗は根本的にその教祖（釈迦）を一にすると共に、又その教理を一にすることを知るべし。請う本編本論第一第二を見よ。この歴史眼に又比較眼を雑え、四分五裂の仏教理想を比較研究すれば如何、大小権実顕密教禪聖浄と分裂し、殆んど調和の望みなきが如く見ゆるものの中に於て、歴史的に系統あると共に、又理想的系統の条然たるものあるを見る。理想的系統の条然たるものあるを見ると共に、仏教百千に分かるも、本と一理の開展にして只その写象を殊にするものたるを知る。（中略）もしそれここに旧慣を去り、偏執を離れて、各宗互いにその長を取り短を去らんか、即ち仏教中に花あり月あり楼台ありと謂うべき、完全の宗教を見るに至らん。故に余は大いに仏教各宗の合同論を主張せんとす。<sup>(29)</sup>

仏教研究に必須なのは、歴史眼である。歴史眼から見れば、種々に分裂した教理も、根本は釈迦であり、一つの真如に帰する。この歴史眼に比較眼を加えて、四分五裂の仏教理想を比較研究すれば、歴史の系統と共に、理想の系統の一条がはつきりと見える。これをしっかりと見れば、仏教が百千に分裂しても、根源は一理であり、その写象に過ぎない。偏執旧慣を離れて、各宗の長所を認め、短所から去り、それぞれを仏教中の花・月・楼台と認め合え



ば、仏教は完全なる宗教となるであろう。故に私は、仏教各宗の合同論を主張するのであるという。『日本仏教史綱』における日本仏教教理の分派・門下・分流の研究は、実は絶望的な危殆を描いたのではない。その歴史眼と比較眼によって、各宗教理の長所を見つめ、すべて一理の展開であり、理想的系統があり、融和と統一できることを示そうとした夢ある期待の書であったことを、この『仏教統一論』によって明らかにしたのである。

村上專精の日本仏教史研究は、三上参次に、触発されて仏教史研究の導火線になる決意によって始められ、三上の所属する史学会の研究法に学びながらも、その方法を学術的・考証的・抹殺的で、事実厳格主義で真理の順応を見ないと批判し、今後あるべき仏教史研究の姿勢・方法を提示したのである。

## 6 辻善之助の宗論研究

三上参次が国庫より莫大の費用を投じ集めた岳の如き史料を前に、その三分の二が仏教史料であると吐露したのは、明治二十五年頃であり、それに促された村上專精が研究を始めたのが明治二十七年である。この年、辻善之助は、京都の三高から一高に転校する。その保証人になったのが同郷で姫路中学の先輩の三上参次である。また三上は辻が帝大の学部選択に迷った際の相談にのり、国史を薦め、帝大国史に入ってから、三上の史料探索に随行し学んでいる<sup>(30)</sup>。こうした辻と三上の親しい関係から、辻は村上專精が三上に触発されて仏教史研究を始めたことを知っており、仏教史に関心のある辻は、村上の研究動向に注目していたと考えられる。

辻は、一高時代に史学会の講演に感動し、国史科一年生論文「後北条氏疆域考」が指導教授の推薦で史学界に掲載され、学会デビューし、二年時には史学会委員に選挙されている。こうした時に、村上は『仏教史林』によって、

史学会の研究姿勢を「学術的・考証的・抹殺的」と繰り返し批判し、各宗の仏教研究を「弁護」的研究と批判し、独自の「仏教の眼光」と「歴史眼」「比較眼」という研究姿勢によって、「宗派・門流・分派」を明確にする『日本仏教史綱』を発表したのである。明治三十一年九月に上巻・翌三十二年四月に下巻が刊行された。

辻は、この年七月、大学院に「政治の方面より観察したる日本仏教史」という研究テーマを掲出した。このテーマに関して、日本仏教史を選んだのは、父の影響であるが、「政治の方面」としたのは、父の仏教思想や信仰姿勢に対する懐疑があつたと指摘した。そうした個人の感情的側面もあるが、より積極的には「政治の方面」から研究することの学問的意義を見出したという面も考えられる。それが、村上が史学会の研究姿勢を批判しつつ仏教思想を根底に置いて「宗派・門流・分派」を示した『日本仏教史綱』に対して、辻は正しく宗派对立の事実を見る必要性を認識し、これに基づいて「政治の方面より観察」とすると研究テーマが設定されたと考えられる。辻の『日本仏教史の研究』の中で、最も村上の宗派間問題と鋭く対比的な論考は、宗論関連の論考である。

宗論に関する論文は、七・八・十二・十三・十四・十五である。これらの発表時期は次の如くである。

明治三十三年（一九〇〇）「八・足利初代天台宗と禅宗の軋轢」

明治三十六年（一九〇三）「十五・慶長十三年浄土日蓮宗論について」

明治四十年（一九〇七）「七・鎌倉時代における禅宗と他宗の軋轢（正中宗論）」

明治四十二年（一九〇九）「十二・戦国時代の仏教」

明治四十四年（一九一一）「十三・織田信長と仏教」

明治四十四年（一九一一）「十四・安土宗論の真相」

最初に書かれた「八・足利初代天台宗と禅宗の軋轢」は、鎌倉時代に興隆し、足利時代の黄金時代を迎えた禅宗

に對し、王朝時代に鎮護國家天子本命の祈願所であり、全權を振るつて、勢力を精神界裡に占めていた真言天台が怒る。それを「山門たるもの、いかでか之を默視せざらんや。争いのおこる洵に自然の数なるべし」と評し、その宗派間の激しい抗争の実態を、多くの史料を駆使して明らかにする。こうした宗派間の激しい抗争に着目し、『史学雑誌』に掲載したのは、明治三十三年の九月、十月、十二月、三十四年二月、三月の、計五回である。しかし原稿にしたのは、明治三十二年六月であると記している<sup>(31)</sup>。

辻善之助の論文は、村上の『日本仏教史綱』に觸発されて、宗派間問題を、外から政治的な眼によつて、「学的・考証的」に「事実史」として明らかにしようと試みたものと考えられる。村上の下巻出版の後、二か月後と近いが、上巻からは、九か月後である。辻の五回に及ぶ論考には、思想的な判断は全く含まれない。そして結論は、天台の行動は「すべて是れ嫉妬羨望の念より起り、他を排し自ら擅にせんとの心」が原因であり、「山門は南朝と相俟つて、その勢を持せんとし、禅宗は北朝と相倚つて、以てその盛大を致さんとするの形勢を成せり。」すなわち天台と禅の背後には政治権力がある。そして「畢竟するに応安に於ける幕府の措置は、無定見、無主義の誹を免れざるべきなり。」「また紛擾を頻繁ならしめしは朝廷公家衆その責の過半を頌たざるべからざる也。」と締めくくっている<sup>(32)</sup>。すなわち宗派間の問題を、一切思想的に判断せずに、その背後に政治的影響を見るのである。

辻善之助が、村上の提起した宗派間の問題に関して、更に発展的に論じたのが明治三十六年（一九〇三）「十五・慶長十三年浄土日蓮宗論について」である。この論考は、明治三十六年十月三十一日の史学会の例会での講演を、翌三十七年一月、二月の史学雑誌に発表したものである。この論文は、村上が『仏教統一論 原理編』を明治三十六年（一九〇三）四月に出版した六か月後に、講演している。同じ宗派間問題を扱う論考であるが、両者の論考共、理論的に深められていて、その違いは際立っている。村上は『仏教統一論 大綱論』で、史学会の研究姿勢

を「社会現象の事実史」と批判し、思想發達の比較教理史を主張した。こうした思想發達の比較教理史に対して、辻は、全く別な判断を示す。

辻はこの論文で、序論と本論を置く。序論で、日本の宗論の歴史を概観し、「本朝四ケ度の宗論」を挙げる。応和の宗論・文治の宗論・安土宗論・慶長の宗論である。応和宗論は、村上天皇が応和三年（九六三）八月、清涼殿において、南都北嶺の僧各十人を召して行つたもので、「研究のため、南北の僧を集め、論義を催されたといふに過ぎない」。南都と北嶺の間に「自から争はあつたであらうけれども、とにかく平和の争である」。また次の文治の宗論は、法然の大原問答の事で、後に天台座主となった顕真と諸宗の碩学が、法然と、「討論したといふ丈で、別に政治上から見て、深い意味は有つたといふ訳でも無い」と、説明し次のようにまとめた。

四ケ度宗論の中で、前二つは、後の二つと、大に趣きを異にして居るのであります。初のは二つともに、平和に起りて平和に局を結び、特にある教義上の問題の研究の爲めに起つた事であつて、一宗内の論義とさほど差別は見えぬのみならず、これが政治上に關係をもつ事も薄いのであります。<sup>(33)</sup>

宗派間の争いである宗論は、教義上・思想上の論議であれば、それは「平和の争」であり、政治上から見て、深い意味はないというのである。村上が仏教の「宗派・門流・分派」を思想的教義的に扱う限りは、政治的に深い意味はないというのである。それに対して、残りの二つの宗論は、思想的には些細なことをきっかけに、政治的に大問題となった事件である。

第三の安土宗論は、信長の居城安土の城下での浄土宗の僧の法談に、法華の信者が不審を懸け、それが原因で浄土宗の僧と法華宗の僧が集まって、宗論となり、法華宗の者が詞に窮し、詫証文、科料二百金を徴せられ、騒ぎを起こした法華三名の頸が斬られ、日蓮の徒が千人許も群集し大騒ぎとなった事件である。

辻は、第四の慶長宗論の前に、更に大きな社会問題となった松本問答を挙げる。「天文法華の乱といふは、凡そ宗論の中で、最その惨禍を流した事の甚しきもの」と評し、天文五年三月の頃、叡山の僧が、京都一条烏丸の観音堂で説法して、法華宗を誹謗した。それを聞いた法華の徒に論破され、法衣をはぎ取られた。それをきっかけに天台の山法師等が法華宗徒を伐つため、諸国の末寺及び宗徒をよび集め、凡十万の兵が、法華宗の寺々を攻め、法華宗も、徒を集めて戦うが大敗する。その時、京の二十一ヶ寺の法華の本寺は、悉く焼き払われ、死者三千余人、京都の市街三分の一が焼かれる大さわぎとなったというのである。

辻は、こうした宗論を次々と列挙し、「かくの如く数々宗論のあつた中で、天文の法華の乱、安土の宗論、慶長の宗論、この三つは政治上に關係を有すること深く、最も注意を値するものであります。今はその中の一なる慶長宗論について申述べるのであります。」と序論を締めくくり、本論に移る。

本論では、事の発端・宗論前の情況・宗論対決・当時の実情・日経の沈黙について・日経等京都への護送及び処刑・日蓮徒の詫証文・日経流浪と其末路とその経緯を、多くの史料を駆使して、実態に迫る。

発端は、尾張熱田の寺で法華の僧日経が折伏説法するのを、浄土宗の僧が邪魔をしたことである。日経は二十三条の公開状によって論戦を求めた。これに応えて浄土僧は、江戸増上寺に二十三か条を送り、家康に訴える。家康は、江戸の新殿で、法論を開く。浄土側は増上寺源誓以下、主だったものが対論の任に選ばれ、判者は高野山の頼慶、聴衆は他宗から十名、幕府方老中以下列席するところへ、遅れて日経以下五人の弟子が来る。日経は一切口を開かず、負けと判定され、処罰される。これを機に、幕府は、浄土批判を禁じる詫証文をとったという事件である。結語として辻は、次のようにいう。

これは政治の当局者からみれば、あまり活動せられては処置にこまるもので、平和を破り秩序を乱す恐がある



故に、十分に之をおさへつけ、之によりて他のみせしめに、之を懲らしたのである。家康は元来宗派のすべてには、極めて公平の態度をとり、一宗のものが、他宗を誹毀するなど、いふことは、社会の秩序を保つ上よりして、之を喜ばず、その最も御氣に入りの源訾でさへ、かつて天台宗をそしりて、家康の機嫌をそこねた事がある<sup>(34)</sup>。

平和を破り秩序を乱す恐れのあるものは、宗派・門流・分派にこだわるものであり、これをおさえつけ、社会の秩序を保つのは政治家の公平な態度に依るのであるとしているのである。

まさにそれは村上が「仏教の眼光」を根底に置き「歴史眼」「比較眼」によつて、四分五裂の「宗派・門流・分派」の長所を見つめれば、その先に歴史の系統と共に、理想の系統の一条がはっきりと見え、仏教は融和と統一に向かうことができるとする理想論に対して、事實は宗派・門流・分派にこだわり、他宗を誹謗するものによつて、悲劇と被害が繰り返されているのであり、そうした乱れを正し、平和を保つのは政治の役割であるとするのである。辻は、これ以後、正中宗論・安土宗論などを論じ、「戦国時代の仏教」において、この時代の仏教の特徴について次のように論じている。

抑、この宗論と申すものは、戦国時代の一つの特徴と認めるべきものでありまして、この後の時代にも、あることはあり、また、江戸時代になつてもありました。それは、この戦国時代の名残を留むるに過ぎぬのであります。その由つて来る所は、即僧侶の自衛上より、競争の意味を以てあらはるゝのであります。すべて競争は、物の発展を来すものでありまして、この戦国時代と申すも、一般の社会には、諸大名の競争上、ある点に於いて、頗る良結果を来し、後日、叡山の横暴宗教界の地方分権我国文明発展に少なからぬ影響を及ぼして居ると認むべきものもあります。然しながら、この宗論ばかりには、ただ弊害ばかり多くして、よき結果は出な

かつたのであります。<sup>(35)</sup>

宗論は、戦国時代の一つの特徴と認められるほど活発に行われ、江戸時代まで、その名残として論議が行われた。論議は、僧侶の学問上の競争である。競争は一般には、文明発展により影響を及ぼすと考えられるが、宗論だけは、弊害ばかりで、良い影響はなかったとしている。

以上、辻善之助の論議研究をまとめると、村上の影響から、宗派間問題を考察し、その中で宗派間の論議である宗論に着目し、その宗論を二種類に分類する。一つは教義上・思想上の平和的な争いである宗論であり、今一つは宗論が争論となり、争乱となり社会問題化、政治問題化する宗論である。前者は鎌倉時代以前の宗論であり、後者は鎌倉時代以降に活発となり、ついに戦国時代の特徴の一つに認めうるほどに頻発し、地方にも及んだことを豊富な史料によって論証した。しかしその宗論は、弊害ばかり多く、文明発展に寄与していなかった。

## 7 おわりに

明治は、論議から始まった。「一、広く会議を興し万機公論に決すべし」という御誓文の趣旨が、諸藩に受け入れられ、福沢諭吉の演説の勧めや、議論の紹介から、世の人々に広がり、地方議会の開設で、全国に広がる。明治二十三年に国会開設が決まると、議論は更に加熱した。この議論の根幹には西洋の論理学があったのが西周以後、論理学の導入が活発となる。それに対抗して、東洋にも仏教の因明という論理学があると主張したのが、雲英晃耀である。日本には因明研究の伝統があり、その中で天皇が因明論議の論場を宮中に作り、大臣が論議研究をし、裁判官が因明により論議の判定をするという、論議の伝統があったとした。そして雲英晃耀は仏教論議を積極的実

効的に評価しそれを活かそうとしたのに対して、辻善之助の仏教論議の研究は、全く否定的な評価である。日本の論議は戦国時代に爆発的に広がり、この時代の一つの特徴となったが「ただ弊害ばかり多くして、よき結果は出なかつた」とした。その弊害の「最も著しきものは、本願寺及日蓮宗であります。殊に本願寺は一向一揆として北陸道、三河、伊勢、畿内、近傍に於て、非常な勢力を持つて居つた」とした。更に「宗教界に於いても、矢張り他の社会と同じ様に其光は漸く暗黒の裡に蔽はれて、一口に申すと、暗黒時代とも称すべき時」となり、それは「詰り一口に申して見ると、戦国時代といふものは、仏教の江戸時代情眠の基を作つたといふ事に、帰するだらうと思ひます。」と、論議は、争議のもとであり、争乱一揆の原因であり、世を暗黒時代に落とし、仏教の江戸時代情眠の基をつくつたと批判した。<sup>(36)</sup>

近代の仏教論議研究は、全く対比的な二つの研究があつたのである。一つは雲英晃耀の積極的肯定的未来志向的な評価に対して、辻善之助の否定的暗黒的で江戸仏教情眠の原因をつくつたとの評価である。どうしてこれほど全く対立的な仏教論議研究となつたのであろうか。一つは世代の差・時代的経験の差が考えられよう。福沢諭吉や雲英晃耀は、天保五年（一九八三）生まれであり。雲英晃耀も天保二年（一九八一）生まれである。幕末の激動を経験し、明治の議論の時代に夢をかけた世代である。雲英の弟子である村上専精も嘉永四年（一八五二）で、維新前世代である。それに対して、辻善之助は維新後の明治十年（一八七七）に生まれた。議論が周りにあふれている時代に生まれ、自由民権運動と共に議論が加熱し、その議論紛糾が各地騒動の原因ともなる時代に育つたのである。こうした時代の中にある議論の経験値の違いが、対照的な仏教論議研究を生み出した可能性がある。辻善之助の場合は、また父の影響も要素として大きい。父は真宗門徒であり、中でも石川舜台の熱烈な支持者であつた。石川舜台とは東本願寺の改革主義者である。石川は『本願寺宗勢論』において、一・釈迦と親鸞の法義の「加除増減を許

さず」と宗義を原理化し、二、綱紀肅正を「急速度的に敢行すべし」と急進派であり、三、法主と管長の一体化を主張し、四、「医師と僧侶は貧乏がよい」と主張した。それは「富は志を立てるに起り、富を得て志減し、志の減した退下の始り」だからであるという。こうした真宗退下の始りは「明治十三年以来、錢くれの風を開き」病弊を醸成したと批判する<sup>(37)</sup>。まさに明治十三年以降が、辻善之助の幼少期であり、父は、急進的な改革者石川舜台の熱心な門徒であったのである<sup>(38)</sup>。そして帰宅しては父の議論の原理主義的熱風を煙たく思いつつ育ったことも、辻善之助の論議に対する否定的拒否的姿勢を形成したと考えられる。

以上の対立的な二つの近代の仏教論議研究の共通点は、日本には長い論議の伝統があり、それが政治や法廷で活用され、戦国時代から江戸初期にかけては、論議の時代ともいえるべき影響を与えていたと主張したことである。こうした研究を前提に、日本の仏教論議を研究する必要がある。

## 註

- (1) 小山幸伸「歴史研究と歴史教育の連関「鎖国」研究の動向と、学習指導要領・教科書記述の変遷」『敬愛大学研究論集』九八号、二〇二〇年。荒野泰典『近世日本と東アジア』一九八八年によって、四つの口が明確にされた。
- (2) 新保真紀子「小学校社会科・身分制度成立に関する教科書記述の変遷」『児童教育学研究』二五号、二〇〇六年。
- (3) 鈴木淳『維新の構想と展開』『日本の歴史』巻二十、講談社、二〇〇二年。
- (4) 『誓の御柱』建設運動とその広がりについて「西田彰一『日本研究』五八号、二〇一八年。
- (5) 福沢諭吉は、明治五年（一八七二）に『学問のすすめ』を書き、ベストセラーとなり、次々と続編を出版する。同時に主著『文明論之概略』を執筆した。福沢諭吉は、「説教」を「演説」と言い換え、「論議」を「議論」と言い換え、

西欧的な、より広い公衆を基本に据えたパブリックのイメージを付与する語として「議論」を提示した。

- (6) 兵藤裕己「明治のパフォーマンス―政治演説と芸能」『感性の近代 岩波講座 近代日本の文化史4』岩波書店、二〇〇二年。

- (7) 福沢諭吉『学問のすすめ』明治五年（一八七二）二月に出版され、ベストセラーとなる。明治六年『会議弁』によつて演説・討論の規則を示し、実演する。明治七年に『学問のすすめ』第十二編において「演説の法を勤むるの説」を発表。明治八年『文明論之概略』において、文明の根幹に議論を据え、世界の議論の有り様を説く。

- (8) 福沢諭吉『会議弁』（一八七四）。尾崎行雄『公開演説法』（一八七八）。栗原亮一訳・チャールス・ベル『泰西名家演説集 附・演説法』（一八七九）。高良二訳・ヒュー・ブレイル『泰西論弁学要訣』（一八八〇）。松村操編『演説金針』（一八八一）。小笠原美治『結社演説政談方針』（一八八二）。馬場辰猪『雄弁法』（一八八五）。伊東洋二郎『実用演説法 雄弁秘訣』（一八八九）。吉岡平助『会場秘訣議員弁論法』（一八八九）などがある。

- (9) 雲英晃耀『因明初歩』、国立国会図書館デジタルコレクション、一八八一年。

- (10) 雲英晃耀『因明入正理論疏方隅録』全十三巻の刊行開始。四月十五日〜十二月三十日。『因明大疏』上中下巻四月二十八日発刊。『因明三十三過方隅録』上下巻は四月三十日発刊。『因明入正理論疏 冠註』上中下巻は五月〜十一月に発刊。『因明初歩』十月十九日発刊。『因明大意』十月十九日発刊。

- (11) 雲英晃耀『因明学協会報告』国立国会図書館デジタルコレクション、一八九〇年、二十三頁。

- (12) 雲英晃耀『因明活眼』、国立国会図書館デジタルコレクション、一八八四年、二十頁。

- (13) 雲英晃耀『東洋新々因明發揮』国立国会図書館デジタルコレクション、一八八九年、二頁。

- (14) 畠山省三『因明学之概略』一八九七年。今井清吉『因明学綱要』（法蔵館、一九〇三年）。香村宜円『東洋論理学



史』(博文館、一九〇九年)。森本靖琮『因明術講話』(明昇堂、一九一三年)。村上專精・境野黄洋『仏教論理学』(丙午出版社、一九一八年)など。国立国会図書館デジタルコレクションより。

- (15) 辻善之助『自歴年譜稿』平文社、一九七七年。十八頁。
- (16) オリオン・クラウタウ「辻仏教史学の政治性」『近代日本思想としての仏教史学』法蔵館、二五九頁。
- (17) 辻善之助「研究生活のおもい出」『自歴年譜稿』平文社、一九七七年。一七二頁。
- (18) 日本学士院HP、恩賜賞受賞一覧より (<https://www.japan-cad.go.jp/japanese/activities/jyusho/>)
- (19) 江島尚俊「仏教改革としての禁酒―『反省会雑誌』を手がかりに―」『宗教研究』八四(四)、二〇一一年。
- (20) 座談会「先学を語る―辻善之助博士」『東方学』第六六輯、一九八三年。辻善之助の長男辻達也が語っている。
- (21) 辻善之助『日本仏教史研究』第二集、岩波書店、一九八三年。一一〇頁。
- (22) 村上專精『六十一年―一名赤裸々』(『大正文庫』第十一編)、丙午出版社、一九一四年。二九三頁〜二九八頁。
- (23) 村上專精「仏教史研究の必要を述べて発刊の由来となし併せて本誌の主義目的を表白す」『仏教史林』一八九四年。
- (24) 村上專精「吾曹が仏教の歴史を研究する思想(第一)」『仏教史林』一編第二号、一八九四年。
- (25) 重野安繹「学問は遂に考証に帰す」『重野博士史学論文集 上巻』雄山閣、一九三八年。
- (26) 村上專精「吾曹が仏教の歴史を研究する思想(第二)」『仏教史林』一編第三号、一八九四年。
- (27) 村上專精『日本仏教史綱』下巻、金港堂、一八二二年。二五五頁。
- (28) 村上專精『仏教統一論』(書肆心水、二〇一一年)十九頁。初版は、一九〇一年。
- (29) 右同著、二十〜二二頁。
- (30) 辻善之助、注15、十五頁〜十七頁。

- (31) 辻善之助 『日本仏教史研究 第一巻』 岩波書店、一九八三年。三二六頁。
- (32) 右同著、三二六頁。
- (33) 辻善之助 『日本仏教史研究 第二巻』 岩波書店、一九八三年。一六三頁。
- (34) 右同著、一九三頁。
- (35) 右同著、一一〇頁。
- (36) 右同著、一一二頁～一一三頁。
- (37) 石川舜台 「本願寺宗勢論」 『真宗史料集成 第十二巻 真宗教団の近代化』 同朋舎出版、一九八三年。
- (38) 石川舜台の改革に関しては、多屋頼俊 「石川舜台と東本願寺」 (『講座 近代仏教2』 法蔵館、一九六一年)。注37同書、森龍吉 「本願寺宗勢論」 解題。辻村志のぶ 「石川舜台と真宗大谷派の東アジア布教―仏教アジア主義の形成」 『近代仏教』 十三号、二〇〇七年。中西直樹 『明治前期の大谷派教団』 法蔵館、二〇一八年。辻の幼年期は、石川舜台の第一次宗政時代後半から、渥美契縁一派との抗争の中、殴打事件で引責辞任をし、その後、渥美一派と和解に至る明治十六年頃と考えられる。中西によれば、この頃石川舜台は、在家信者を巻き込んだ公選議会の設立運動を展開していた。